

明治初期のプロテスタント伝道

——1868年—1873年——

山 口 光 朔

序 論

わが国にはじめてプロテスタント系の宣教師が渡来したのは、1859年（安政6年）である。この幕末期における宣教師たちの活躍は、いぜんとしてキリスト教の布教が禁止されている状態のもとにあって、日本語の修得・聖書の翻訳・医療・英語の教授などといったきわめて地味なものであった。とはいえ、その間に個人的な接触やパンフレットの配布をとおしてひそかに伝道をこころみ、数名の受洗者すらつくりだした。いうなれば、幕末期はのちにきたるキリスト教解禁のための準備期であった。その意味において、宣教師たちは明治維新による新政府の政策に大いなる期待をよせた。だが不幸にして、かれらの期待はむなしかった。明治維新後の六年間は、新政府発足の混乱を反映して政情が不安定なために、キリスト教にたいする政策は旧幕時代のそれが踏襲されたままであった。加えるに、維新それ自体は神道の国教化に象徴される神道ナショナリズムの復活をもたらし、キリスト教徒にたいする取り締まりは幕末以上にきびしくなった。浦上キリシタンにたいする弾圧がその好例である。ところがその反面で、新政府が国家的独立の達成という課題から文明開化政策を推進して西洋文化を吸収・摂取せんとし、さらに条約改正の実現をのぞむかぎり、いずれはキリスト教の禁制を解除せざるをえない運命にあった。このような状況のもとにあって、宣教師たちの活躍は、多くの宣教師が来日することと相まって、非合法ながらも伝道に従事する度合いがまし、幕末にくらべていちだんと活発化する。そしてついに、1872年3月（明治5年2月）に、わが国史上最初の日本人によるプロテスタント教会たる「日本基督公会」が横浜に創立される。ついでその翌年2月には、キリシタン禁制の高札が撤廃されるのである。

そこで本論においては、幕末から維新にいたる時期の宣教師の活動をわが国における本格的なプロテスタント伝道の準備第一期^①として、その後の維新より

キリスト教禁制高札撤去の1873年2月（明治6年2月）にいたる準備第二期におけるプロテスタント伝道の歩みを概観してみることにする。

注

- ① この時期にかんしては、拙論「日本プロテスタント史序説」『桃山学院大学経済学論集』第1巻第1号（1959年2月）所収をみよ。本論はその続編である。

I 明治新政府とキリスト教

明治維新によって発足した新政府は、幕府とはことなり、文明開化政策の推進にみられるごとく、きわめて開明的な性格をもっていた。しかしキリスト教にたいする態度は、幕府が幕末にやや柔軟な態度をとったのとは逆に、きわめて強硬であり、改めてキリシタン禁制の高札をかがげさせて、積極的な弾圧策をとった。

まず明治新政府は、祭政一致・神道国教化の方針にもとづいて、五カ条の誓文が発布された翌日の1868年4月7日（慶応4年3月15日）に、「切支丹邪宗門ノ儀ハ堅ク御制禁タリ若不審ナル者有之ハ其筋之役所へ可申出御褒美可被下^①事」というキリシタン禁制の高札を改めて全国にかがげさせ、禁制政策の持続を確認した。もちろん、この布告にたいしては諸外国からキリスト教を邪宗門とすることへの抗議があったので、5月15日（4月4日）に、「切支丹」と「邪宗門」とを明白に区別する新しい高札が改めてかがげられる^②。そして、これにひきつづいて、同年より翌年にかけて、九州は浦上のキリシタンにたいして大弾圧が加えられ、多くの信徒が捕えられて改宗を強要され、あるいは諸藩にあずけられた^③。この迫害は、当然プロテスタントにもおよび、かれらは直接ないし間接にいろいろの迫害をうけた。

キリスト教を信奉する条約国の使臣はキリシタン大弾圧の報を聞いて、政府に嚴重に抗議を申し入れ、大阪において会議を開くことを要請した^④。この会議には、大隈重信が政府を代表して出席し、イギリス公使ハリー・パークスのキリシタン弾圧にたいする非難にたいして、キリスト教はつねにわが国で問題をおこしてきたがゆえに、日本は自国の法律によって自国民を罰する権利を有していると主張した^⑤。そしてキリシタンの処分は続行され、1870年1月（明治2年12月）には3000名の者が諸藩にあずけられた。その理由は、キリシタンと他

の住民との悪感情と対立の激化をふせぐことだとされた。外国使臣団はふたたび明治政府に抗議して、会議がひらかれた。太政大臣三条実美はその席上で、キリシタンを追放処分に付したのはその信仰のためではなくて、久しく政府にたいして反抗的であったからにはほかならず、けっして虐待してはいないと言明した。^⑥これらの主張はたんなるいいのがれであって、政府側の真意は、あくまでもキリスト教禁制にあったとかがえられる。もちろん、内部的には、外交的な考慮からのキリスト教黙認論がはやくからとなえられてはいたが、^⑦大勢はいぜんとしてキリスト教禁制に傾むいていた。そして浦上キリシタンの処分はつづけられ、プロテスタントも少数ながら投獄された。すなわち、1868年（明治元年）にフルベッキから受洗した清水宮内は翌年に長崎で投獄され、同年に長崎で聖公会のG・エンソルから受洗した二川（小島）一騰は70年（明治3年）に投獄され、また組合教会のD・C・グリーンやO・H・キューリックの日本語教師をしていた市川栄之助は、洗礼もうけていないのに71年（明治4年）に捕えられて、翌年に京都の獄舎で病死したりした。^⑧このような弾圧は、73年（明治6年）2月のキリスト教禁制の高札撤廃までつづくのである。

ところで、高札撤廃をもたらす直接的な契機となったのは、プロテスタントに対する迫害であった。じつは、さきの市川栄之助が逮捕されたさいに、グリーンやキューリックらのアメリカ人宣教師が熱心に釈放運動をやり、ちょうど1871年（明治4年）に日本を出発して米国におもむいた岩倉具視全権大使一行がアメリカの国務長官と会談したさいに、市川の逮捕が問題にされた。^⑨このことより、大使一行はキリスト教徒弾圧は対外交渉に不利であることをさとり、キリスト教解禁を断行する必要性を痛感する。そして72年4月（明治5年3月）にいったん帰国した一行の大久保利通・伊藤博文らは、正院に高札撤廃などをつぎのように具申した。

「日本ノ法律中ニ外教ノ明禁ナシト雖モ、尚ホ高札ニ其禁令ヲ揚示スルヲ以テ、外人ハ一概ニ自由信仰ヲ妨クルノ野蛮国ト見倣シ、対等ノ権ヲ許スコトヲ甘ンセス故ニ此高札ノ禁令ヲ除ク事」^⑩

ちょうどそのころ、神祇省が廃止されて教部省が新設され、神道国教化政策から国民教化政策へと転換し、さらに同年度にはキリスト教徒らを逮捕せず寛大な処置をとるようにとの秘密の訓令が各府県長官にくだされて、さきの清水

⑪
宮内や二川一騰らが出獄した。こうしていよいよ73年（明治6年）2月24日、すなわち岩倉全権使節の帰国直後に、禁制の高札が正式に撤廃されるにいたる。この間に浦上キリシタンは500名が改宗したが、のこりの者は禁制の高札撤廃後に帰郷を許された。このことにかんする統計的な詳細は不明であるが、^⑫宣教師の報告によると、660名が死に、1981名の者が帰郷したとのことである。このことをみても、解禁の端緒が、在日外国使臣団の抗議と相まって、とくにプロテスタント系の宣教師たちの運動によってつくられたことがわかれる。

とりわけ、グリーンやギュリックは、市川の逮捕によって大きなショックを受けて釈放運動に奔走した。グリーンは、市川が捕われた直後に、「われわれの召し使いや教師以外には、ひとりとして教会に入ろうとはしなかった^⑬」と報告している。またギュリックは、神戸でバイブル・クラスをひらいていたが、それに出席する者たちは遠くへ移住することを強制されて、出席を不可能ならしめられたとのことである。^⑭もちろん、このような事情は、かならずしも他の地の宣教師たちの報告とは一致しない。その当時在日した宣教師たちの報告の多くは、バイブル・クラスにたいする人びとの関心のたかまりをつたえるきわめて楽観的なもので、当局から布教にたいする妨害をうけたような報告はあまりない。これはいったいなぜであろうか。この疑問にたいする答えは、ギュリックのつぎのような報告にしめされている。

「いまや宣教師たちは、神戸や長崎のような港町よりも江戸や横浜においてより大いなる布教の自由を許されている。江戸に本拠をおく中央政府は、キリスト教の禁止令が正式に撤回されていないのにキリスト教の布教を大目に見るポーズをとっている。だが、遠くの港町の知事たちは、保身のために禁^⑮止令を遵守しているかのようである。」

このような事情は、69年（明治2年）にG・F・フルベッキが宣教師であることが歴然としていながらも、明治政府に起用されて開成所の教師になったことでもわかる。また幕末いらい多くの日本人が横浜ないし江戸で洗礼をうけたが、ひとりとして投獄されなかった。そして72年（明治5年）には、禁制下にもかかわらず、横浜に日本人による最初のプロテスタント教会たる「日本基督公会」が発足している。これには、在日外国公館が所在しているということ、および幕末いらいヘボン、ブラウンなどの初期の宣教師たちがその地方に滞在

して、他方面にわたる活躍をとおして着実に地盤を固め、政府要人のあいだにもかなり多くの知人を有していたことなどがあげられよう。

こうして、73年（明治6年）には、禁制の高札が撤廃されることになり、宣教師たちが公然と布教に従事しうる時代がやってくる。だがはたしてそれは、真の意味における信教の自由を意味したであろうか。このことをかんがえるためには、いまいちおう禁教時代の明治新政府の宗教政策と宣教師の活動を検討してみる必要があるそうた。

- ① 『法令全書』明治元年3月15日、65—67ページ。
- ② 同上、明治元年4月4日‘第二日79、107ページ。
- ③ この事情は、浦川和三郎『浦上切支丹史』にくわしい。
- ④ Otis Cary, *A History of Christianity in Japan*, 2 vols, New York and London, 1909, Vol. I., 308
- ⑤ *Sekijon nó Monogatari*, pp. 273-389, quoted in Cary, *Ibid*, pp 310-311.
- ⑥ *Ibid*, p. 317.
- ⑦ 小沢三郎『日本プロテスタント史研究』（1964年）40—41ページ。
- ⑧ 同上、42ページ。
- ⑨ E. B. Greene, *A New Englander in Japan. Daniel Crosby Greene*, 1927, p:112.
- ⑩ 春畝公追頒会編『伊藤博文伝』上巻（1940年）653ページ。
- ⑪ 小沢、前掲書、44ページ。
- ⑫ Cary, *Ibid.*, Vol. I, p. 333.
- ⑬ D. C. Greene, *Missionary Herald*, 1871, p. 205.
- ⑭ O. H Gulick, *Missionary Herald*, 1871, p. 349
- ⑮ *Ibid.*, p.82.

Ⅱ 政府の宗教政策と宣教師の活躍

明治新政府は、維新直後の1868年6月（慶応4年閏4月）に天神と地祇の祭祀と行政をつかさどる神祇官が設置され、翌年8月（明治2年7月）の官制改革で祭政一致の古制にのっとって太政官の上位におかれるとともに宣教使がおかれ、さらに70年2月（明治3年1月）に大教宣布の詔勅を發布して、神道の普及とともに王土壬民思想の徹底にのりだした。だがこれは、廃仏毀釈・神仏判然の強行をともなったために仏教側の反感をこうむり、またキリスト教排撃は主として外交的な理由からおもうにまかせず、ついに72年4月（明治5年3月）に神祇省（神祇官の後身）が廃止されて教部省にかわり、宣教使もその翌

月に教導職に改められた。ここに神道国教化政策は挫折して、神道と仏教の提携による国民教化策がくわだてられる。そしてキリスト教禁制高札撤去の直後の73年(明治6年)3月には、神仏合同の布教のための教導職養成機関としての大教院が設置されたりする。これはその前年に教部省が設置されたさいに、神仏分離に反対する仏教側の圧力によってもうけられたものであるが、神仏合同という政府の政策はきわめてばくぜんとしていたがゆえにふたたび仏教側から反対されて、やがて解散せざるをえなくなる。そのために、国家宗教を統制するとともにキリスト教徒を改宗させようとする政府の意図は失敗して、かえってキリスト教を容認せざるをえなくなり、75年(明治8年)4月の大教院の解散とともに、いわゆる神・仏・基三大宗教の併立時代がわが国に到来する。

たしかに政府は73年(明治6年)2月24日に、キリスト教禁制の高札を撤廃した。だがここで注意しなければならないことは、高札撤廃の命令はくだされたが、一般への布告はなんらなされず、しかもその通達文がまことにばくぜんとしていることである。それには、つぎのように書かれてあった。

「自今諸布告御発令毎ニ人民熟知ノ為メ凡三十日間便宜ノ地ニ於テ令揭示候事 但管下へ布達ノ儀ハ是迄ノ通可取計從來高札面ノ儀ハ一般熟知ノ事ニ付向後取除キ可申事」

この文面はただ高札を取り除くことを命令しているだけで、キリスト教信仰を公認するとはひとこともいっていない。ところが、外国公使には、2月26日につぎのようにいっている。

「耶蘇宗門信仰の者の儀に付各国人に対し不都合と存し昨年夏捕縛等不致寛宥相心得候様府県長官え相達し置猶また今般高札上に掲る所のものを取除け候此段御心得まで御談し置候^①」

ここにうかがえるのは、「外国人に対し不都合」だから、すなわち外交上やむなく高札を撤去してキリスト教を黙認するといったきわめて消極的な態度だ。そのかぎりにおいて、わが国におけるキリスト教は、公認の宗教とされないうまま、苦難の道をたどることをよぎなくされる。

だが禁教下にあるとはいえ、明治初年の宣教師たちの活躍は幕末におけるそれとくらべるといっそう活発化して、解禁後における本格的な布教のための強固な地ならしをしたといえる。それなればこそ、その後のいくたの苦難にもめ

げず、キリスト教信仰は、ささやかながらもこの日本という土地に確固たる根をおろしたのであろう。もちろん、これは1859年（安政6年）いらい来日した初期の宣教師たちが着実に宣教に従事した努力の成果が、維新とともにいちだんとみのったかの感がある。だが宣教師の活動が活発化した直接的な原因は、維新後における来日宣教師の激増にもとめられよう。

まず維新前には日本に宣教師を送りこんだ伝道団体は四つにすぎなかったがそれが1868年（明治元年）からキリスト教禁制の73年（明治6年）までには、カトリックとギリシア正教を加えると、13の多きにのぼっている。それに比例して宣教師の数も、プロテスタント系のみで、1859年（安政6年）から維新前の67年（慶応3年）までに来日ないし来日の途についた宣教師およびその夫人の数は18名であるのに、68年（明治元年）より高札撤廃の73年（明治6年）2月24日までに来日したのは42名の多きにのぼっている^②。これらの宣教師が、禁教下にもかかわらず、教育・医療・語学教授や、さらにはバイブル・クラス、キリスト教関係の刊行物の配布などをつうじて、福音の宣布に努力したのである。

宣教師たちの活躍でとくに注目にあたいするのは、かれらがいちはやく女子教育のための学校をつくったことであろう。このことは、その当時わが国においては婦人の地位がきわめて低かったがゆえに、その後における婦人の地位向上・婦人解放の理念と情熱をうえつけた点で、無視しえない。すくなくとも明治初年に、ミッション・スクールの先駆をなす四つの女学校がつくられている。

まず69年（明治2年）に来日した米国長老派のカロゾルス夫人が夫と協力して、翌年に東京の築地にA六番女学校を創立した。ついで、日本最初の独身の女性宣教師である改革派のミス・キダーが、同じく70年（明治3年）に横浜で女学校（フェリス女学院の前身）をはじめた。さらに71年（明治4年）に、米国婦人合同伝道協会の宣教師であるミセス・プラインによって、横浜共立学園の前身であるミッション・ホームが創立された^③。そのほかに、長崎に、現在の下関の梅光女学院の前身をなす梅香崎女学校が72年（明治5年）につくられている^④。

① 小沢、前掲書、45ページ。

- ② 同上，70—79ページ所収の伝道会社一覧表および宣教師一覧表参照。
- ③ Cary, *op. cit.*, Vol. II, pp. 68-70.
- ④ 小沢，前掲書，25ページ。

Ⅲ 宣教師グリーンと公会主義

明治初年に続々と来日したプロテスタント系の宣教師のなかでもっともめざましい活躍をした特異な人としては、アメリカン・ボードの最初の宣教師であるD・C・グリーンをあげることができる。かれは、前述の市川栄之助の釈放運動を熱心にやり、キリスト教解禁を実現せしめたかげの功労者である点でも無視できない存在だ。

グリーンは、夫人とともに1869年11月30日（明治2年10月27日）に横浜に上陸した。^①はじめは東京にとどまったが、東京・横浜地方は宣教師が多いので、翌年にみずから宣教師のいない神戸に移り、同地で官憲の妨害をうけながらも、勇敢にバイブル・クラスをひらくなどして伝道に従事した。そして71年（明治4年）に来日したキューリックと協力して74年（明治7年）4月に、神戸に、摂津第一基督公会（現在の神戸教会の前身）を設立する。^②もちろん、かれはフルベッキのように直接政府に影響をおよぼしたりはしなかったが、多彩な活躍をとおしてきわめて広範に感化をあたえている。とくにアメリカからの友人である新島襄が75年（明治8年）に設立した同志社に設立当初から関係したことは日本人の主な宗教人との接触をもたしめ、またかれが条約改正に好意的であったことは日米両国政府の要人との日米相互の理解を促進する仲介者としての役割りを演じた点でも、異例の宣教師であったといえる。

グリーンじしんはアンドーヴァー神学校の出身で、在学当時はいわゆるニュー・イングランド神学がいぜんとして全盛をきわめており、しかもそれにもとづいてつくられたアメリカン・ボード派遣の宣教師でありながら、かれはそのカルヴァン主義とはことなつたかれ独自の自由主義的神学を身につけていたかのごとくである。この点では、明治中期の日本におこってくる新神学の先駆者といえ、とくに新神学が組合教会につよく影響をおよぼすのは、かれが同志社の神学教育に尽力したことに負うところが大きだといえよう。もちろん、そのかれは、米国のユニテリアンとドイツのプロテスタントの影響をつよくうけた新

神学そのものには批判的であったが、1897年（明治30年）には、アメリカから帰朝した片山潜を助けて東京の神田三崎町に日本最初のセツルメントであるキングスレー館を設立するなど、キリスト教的な社会事業にも積極的に尽力したりする^③。

ほかにも、グリーンがきわめてユニークな宣教師であったことをしめすエピソードは多い。かれが神戸にきた当初は、同地に聖公会の牧師がいなかったで、日曜日には隔週ごとに聖公会の礼拝を司式したりした。もっとも、かれはアメリカン・ボードからしかられて、しばらくしてそれをやめざるをえなかった^④とのことである。そのようなかれの行動は、かれの息子によると、「神は“神を愛する人びとのためにすべてのことがなるように”みちびきたもうというかれの摂理の概念」にもとづくものであった。かれは、教条主義ではなくて基本的な点の一致をもとめる態度をとった。そしてとくに日本人にたいして、たえず人間性の尊重ということを強調した。日本人には伝統的にこのことがもっとも欠けていると感じたのである^⑤。これは、かれが当時の日本人の生活にたいしてきわめてふかい理解をもっていたことをしめしている。そしてこのかれの教訓は、神戸ではやくからかれに師事した沢山保羅にふかい感銘をあたえた。沢山は、人間性の尊重こそはキリスト教のもっとも重要な教理のひとつであることをグリーンからまなんで、グリーンの世話で米国へ留学したのち、牧会に献身することを誓い、1877年（明治10年）にミッションの補助をうけない自給独立の浪華公会（現在の浪花教会）を大阪に創立し、さらに翌年に女子教育の必要性を感じて、浪華公会と梅本町公会（大阪教会の前身）の後援のもとに梅花女学校（現在の梅花学園）を創立したりする^⑥。

さらにグリーンの活躍で特筆すべきことは、かれが1872年9月（明治5年8月）に横浜においてひらかれた第1回在日プロテスタント宣教師会議において決議された各派合同の聖書和訳事業に従事することであろう。この会議には、米国長老派・米国改革派・米国組合派などの宣教師が多数出席したが、その席上で委員会がつくられて、グリーンもその一員にえらばれた。またかれは、同会議においてS・R・ブラウンの提案した無教派主義を積極的に支持し、すべての教会を72年（明治5年）に横浜に創立された日本基督公会にならって「基督公会」と称することに賛成した^⑦。この提案は、出席者によって満場一致で可

決され、つぎのような決議文がつけられた。

「夫れキリストの教会は、キリストに在りて一体たり。プロテスタント教徒間の諸教派分立の如きは、偶然の出来事にして、キリスト教徒の精神的一致を妨けず。然れども既に、キリスト教国に於ても、尚ほこれが為、教会の一体たることを曖昧にする嫌ひあり。況哉、諸派分立の歴史を了解せざる異教国に於てをや。且つそれ吾等宣教師は、あまりに顯著なる差別より生ずる弊害を避けんが為に、伝道の方法を一定せんことを希望するものなるが故に、吾等は、本会議に由て与へられたる此の最初の機会を利用して、自今吾等の援助に由て設立せらるべき日本の諸教会に於ては、成るべく其名称及び組織を同一ならしむべく努力せんことに、同意す。即ち、其名称は、基督公会と云う公同的のものと為し、其組織は、各教会の政治を、其会員の協賛に由り、教師及び長老職に由りて執行せらるべきものとす。右決議す」^⑧

この背景には、そのころまでのアメリカ教会には諸教派協力の要請とその精神がきわめてつよかったことがいえる。とともに、1869年（明治2年）を境として、アメリカにおいてその協力関係が喪失することが、わが国における教会がはじめは無教派主義で発足しながらも教派関係を払拭することができず、数年をいわずして教派的分裂に見まわれることに影響をおよぼしたとかがえら^⑨れる。事実、最初は無教派主義で発足した日本の教会は、のちに長老派の宣教師のあいだで無教派主義と長老教会主義とが対立したのが機縁となって、けっきょく77年（明治10年末）までにはまったく有名無実となってしまふ。とはいえ、とにかく日本において、公会主義というかたちではじめて教会がつくれ、宣教師もまたその方式でわが国での伝道を推進することを決議したことは、注目にあたいする。この公会主義は、73年（明治7年）4月に決定された日本基督公会条例によってうらがきされている。公会条例第二条例にはつぎのごとくある。

「我輩の公会は宗派に属せず唯主耶蘇キリストの名に依て建る所なれば単に聖書を標準とし、是を信じ、是を勉る者は皆是キリストの僕、我儕の兄弟なれば、会中の各員全世界の信者を同視して一家の親愛を尽すべし。是故にこの会を基督公会と称す」

すなわち、この公会主義を、外国人宣教師も日本人信徒も、ともにうけいれた

のである。

もちろん、この公会主義をどのようにみるかということは問題だ。一般的にそれは無教派主義といえるが、厳密に言えば、いかなる教派の人びともうけられるという積極性があった点では、「教派無差別主義」というほうが正しいであろう。そのこととともに、もうひとつこの公会主義で注目すべきことは、さきの公会条例が、福音同盟会の信仰個条に準拠してつくられたことであろう。この福音同盟会（のちに万国福音同盟会と改称）は、1846年に全世界の52のプロテスタント各派の代表者が集まってつくった超教派的・超国家的な組織で、じつは横浜在住の外国人が72年1月1日（明治4年11月21日）に福音同盟会の新年初週祈禱会をやったのを見聞したバラ英学校に学ぶ学生たちがそれになってやった初週祈禱会が発展してして日本基督公会になるのである^⑩。こういうところにも、わが国最初のプロテスタント教会が無教派ないし超教派的なものとなった原因がうかがえる。このことは、教会の再一致がさげばれている今日からかんがえたと、まことに意義あることというべきであろう。

現在日本聖公会がその当時の「公会」という名称をつけていることも、そのような初期の教会の歴史と無関係ではない。使徒信経は、わが国ではヘボンの『三要文』（1872年〔明治5年〕刊といわれる）やウィリアムス主教の『信経問答』（73年〔明治6年〕第一版）においてはやくも「聖公会を信ず」と訳されている。もちろん、これは直接には英国教会を意味するのではなくて、さきの「基督公会」と同じく広義のキリストの公同教会を意味するのであるが、それが日本基督公会の成立や第一回のプロテスタント宣教師会議の決議と関係があることは、容易に想像される。そしてそれが、公会が分裂後に、1879年（明治12年）に独自の『聖公会禱文』がつくられるなどして、87年（明治20年）2月に大阪川口の三一神学校でひらかれた創立第一総会において、「日本聖公会」^⑪なる名称が、「監督教会」「日本基督教会」説を圧倒して決定されるにいたるのである。ここにも、プロテスタント各派をつうじて、わが国初期のプロテスタント伝道の伝統はいきているといえる。

① E. B. Greene, *op. cit.*, p. 82.

② 武藤誠編『神戸教会90年小史』（1964年）1ページ。

③ 片子沢千代松『日本新教百年の歩み』（1957年）71ページ。

- ④ E. B. Greene, *op. cit.*, p. 105.
- ⑤ *Ibid.*, p. 119.
- ⑥ 比屋根安定『日本近世基督教人物史』（1935年）182—185ページ。
- ⑦ E. B. Greene, *op. cit.*, p. 134.
- ⑧ 比屋根, 前掲書, 141—142ページ。
- ⑨ 溝口靖夫「アメリカン・ボードの初期の教派関係」『神戸女学院大学論集』第11巻第1号（1964年6月）1—18ページ。
- ⑩ 土肥昭夫「日本最初のプロテスタント教会」『キリスト教社会問題研究』第8号（1964年4月）24—33ページ。
- ⑪ 日本聖公会歴史編纂委員会編『日本聖公会百年史』（1959年）126—127ページ。

Ⅳ 破邪論とキリスト教肯定論

たしかに初期の宣教師たちの活躍はめざましかった。1872年3月（明治5年2月）に、横浜に日本人によって「日本基督公会」ができたことは、その結実のひとつである。同教会は、はじめ11人の日本人によって創立されたが、キリスト教禁制の高札撤廃が布告される73年（明治6年）2月までのわずか1年足らずのあいだに、合計6回も洗礼式がおこなわれ、受洗者26名（うち女性3名）で、これに既受洗者6名（うち女性1名）を加えて、禁教下にもかかわらず、32名の会員を有していた。もっとも、そのなかには第一回に受洗した安藤劉太郎（関信三）と転入会の仁村安三、第二回の桃江正吉（正木護）のような三人の被邪僧が謀者として潜入していた。こういうところに、当時の伝道のむつかしさがしめされている。しかしながら、同教会は、連日午後4時から聖書講義と祈禱会をもち、さらに毎水曜の夜には山手で集会をもつなど、きわめて活発に活動した。禁教下に受洗して教界の著名人ないし伝道者になった人には、本田庸一（第三回）、井深梶之助（第六回）、熊野雄七（第二回）などがある。かれらはブラウン塾の出身で、いわゆる「横浜バンド」の一団である。本多はのちに青山学院長や日本メソジスト教会監督に、井深は明治学院総理に、熊野雄七は明治学院幹事になる。さらに高札撤廃直後の第七回洗礼式ではのちに富士見町教会牧師や東京神学社校長になる植村正久が受洗している。その意味においては、わが国最初のプロテスタント教会は、その後のキリスト教発展のためにまことによき種をまいたというべきだ。そしてその功績は、同教会を指導したJ・H・バラ、D・タムソン、H・ルーミス、S・R・ブラウン

らの活躍に帰せられるべきであろう。

とにかく、禁教下において、キリスト教は宣教師たちの勇敢なる活躍によって、着々とわが国に根をおろした。だがキリスト教は、政府の禁制政策で伝道を公けに禁止されているだけではなくて、仏教や儒教の側からも反対された。とくに明治初年には、宗教論としての反キリスト教論が仏教や儒教の指導者たちによってとなえられ、それが民間にかなり流布される。いうまでもなく、キリスト教反対論は、かつてのキリシタン伝来いらい、織豊時代から徳川時代にわたっていわゆる破邪論としてひろくゆきわたっていた。その意味では、明治初年のそれは従来の破邪論にもとづく破邪論の延長であるとともに、政府の神道国教化政策に刺激をうけた仏教側や儒教側がその余憤を新規にもたらされたキリスト教にむけることによって、いちだんと反キリスト教論が喧伝された。

まず明治初年の儒教の立場からの代表的な反キリスト教論者としては、安井息軒をあげることができよう。当時の反キリスト教論の多くはいたって感情的なものであったが、かれの論はかなりキリスト教を研究した合理的なものであった点で、注目にあたいする。安井の反キリスト教論は、1873年（明治6年）に出版された『弁妄』なる著書によってうかがいしることができる。同書には、元薩摩の執政島津久光の「我邦、西洋百工技芸の靈巧に服する者は、必ず併せて耶蘇教を信じ、或は乃ち、其教を国中に敷かんと欲す。是れ、大患也。それ耶蘇教の妄誕は、固より弁ずるに足らず。其言甘美、尤も人を惑はし易し」との序文が付せられてあり、本文は五篇に分かたれて簡明にキリスト教を攻撃している。第一篇では、創世説を批判して神がアダムの肋骨をとってエホバをつくったとすれば、いったい天地万物をつくった材料はなにかと問い、エホバは残忍な神だときめつける。第二篇では、イエスの教えを問題にして、君父にそむいても神の命にしたがうということは儒教の教えに反することを強調する。第三篇では、キリストの贖罪と復活を批判して、キリスト教はそのような作り話をもちいて人びとをあざむく妄説だときめつけている。第四篇では、キリスト教の来世観を批判するとともに、ヨーロッパの宗教戦争に言及して、戦乱をもたらす危険性があると警告している。最後に第五篇では、儒教的宇宙論、人性論を説いて、キリスト教の普及は天皇中心の国情にあわぬがゆえに阻止すべきだ^②と説いている。これがその概略であるが、説得力にとんでいた点

で、知識人のあいだにすくなからざる影響をあたえたものとおもわれ。

仏教の側の代表的な反キリスト教論者としては、鵜飼徹定があげられる。かれは、幕末から破邪論者としてしられ、1860年（万延元年）に『闢邪管見録』をだしたのをはじめとして、『釈教正謬初破』（1868年）、『笑耶論』（1869年）などの著書でキリスト教を攻撃し、さらに智恩院の華頂山文庫より『南蛮寺興廃記』『破提字子』などのような破邪書を復刻したりした。かれの論そのものは、キリスト教をふかく研究してはおらず、内容は感情的な邪教論の域をでなかった。しかしながら、当時の仏教界の指導者として、1872年（明治5年）に教部省の権少教正になるとともに小石川伝通院の第62代管長に任ぜられさらに74年（明治7年）に智恩院第75代管長になったりする。その点で、政府の神道国教政策にたいする仏教側の余憤と相まって、一般に邪教観を徹底せしめるために大いなる影響力をもっていたことがかんがえられる。

このような反キリスト教論とは反対に、儒教とキリスト教との融合をこころみ、あるいは両者のあいだに一致点を見いだして、すすんでキリスト教肯定論をとらえた人もいた。たとえば中村敬宇（正直）がそれである。かれは幕末の儒者で、幕臣時代には留学生の監督としてイギリスにおもむき、維新後には静岡学問所一等教授となり、スマイルスの『西国立志篇』やミルの『自由之理』を訳し、また明六社の一員になることなどでも有名だ。その中村は、71年（明治4年）に「擬奉西人上書」なる一文を書いて、天皇にキリスト教をすすめるという形式でキリスト教の採用をといている。そのなかで、かれはつぎのようにいっている。

「陛下もし、果して西教を立てんと欲せば、即ち宜しく先づ自ら洗礼を受け、自ら教会の主と為りて億兆を唱率すべし。若し果然此を行はば即ち今より以後西国君主の陛下を敬愛する者如何ぞや。西国人民の陛下を祝福する者如何ぞや。当に欣々然として相語って曰うべし。亜細亜は概ね上帝道理を知らず、日本独り之を重んずるを知る。豈に東方の欧羅巴に非ずや。日本、亜細亜第一富強の国と為んこと、豈目を刮て待つ可からざらんやと。」^④

中村は、宣教師とも接触がふかく、かれの『自由之理』にはアメリカのE・W・クラークが序文を書いており、74年（明治7年）には養子一吉とともにクリスマス^⑤の日に横浜でカナダ・メソジスト教会の宣教師カックランから受洗す

る。かれに似た人物としては、森有礼があげられる。森もキリスト教に関心がふかく、はやくからその一夫一婦主義を鼓吹したし、72年（明治5年）には、駐米公使として在米中に三条実美公に建白するというかたちで、*Religious Freedom in Japan* と題する英文のパンフットを出版して、日本におけるキリスト教排斥を非難し、近代的な信教の自由を確立すべき必要を論じた。そしてのちには、みずから受洗してキリスト者となる。また72年8月15日（明治5年7月12日）付けの『東京日日新聞』には、キリスト教解禁論の投書が掲載される。さらに9月（8月）には、『新聞雑誌』誌上にさきの中村敬宇の「擬奉西人上書」が訓点おくり仮名つきで掲載されたりする。J・C・ヘボンらの努力によってかねてから明治天皇に聖書を献上することが実現して、そのニュースが『博聞新誌』誌によって一般につたえられたのは、その12月（11月）のことである。じつは、政府も、同年の夏には、内外の圧力、とくに外国側のそれによって、やむなくキリスト教の容認にふみきることを決意したものとおもわれる。というのは、従来の処罰方式を改めて、「切支丹を捕縛等不致寛宥相心得候様府県長官へ」通達しており、禁制の高札にかんしてもそれが破損したばあ⑥いには、「以来修繕ヲ加フルニ不及」などと通告している。

このように、1872年（明治5年）という年は、まさにキリスト教解禁前夜の感を呈し、いよいよその翌年はじめに、禁制高札の撤去にともなう解禁をむかえるわけである。もちろん、それはけっしてキリスト教の公認を意味しはしなかったが、信徒や宣教師にとっては解禁を意味した。わが国におけるプロテスタント伝道が本格化するのはいずれ以後である。

- ① 小沢、前掲書、第二章「禁教下における『日本基督公会』の創立とその発展」66—126ページ。
- ② 比屋根、前掲書、119—121ページ。
- ③ 同上、123—124ページ。
- ④ 小沢、前掲書、42ページ。
- ⑤ 同上、228—249ページ。
- ⑥ 同上、107—108ページ。

(付 録) 明治期伝道史関係欧文文献目録

A Bibliography of Materials
related to Church Missions
during the Meiji period

PERIODICALS

American Antiquarian and Oriental Journal, Atkinson, J. L., The Progress of Christianity in Japan, Vol. 5, 1905.

American Catholic Quarterly, Vol. 16, pp.628, Jesuit Missions in Japan.

American Church Review, October, 1878, p.11, Kale, P., Missions of the Russian Church in China and Japan

American Journal of Sociology, March 1932, Price, M. T., Social Science Materials in Far Eastern Culture.

Andover Review, Vol. 8, pp.202 and Vol. 15, pp.321 and 541, Missions in Japan.

_____, Vol. 15, pp.598-613, Kishimoto, Nobuta, Religious Crisis in Japan in 1891.

_____, Vol. 2, pp.520, Greene, D. C., Church Union in Japan.

Bibliotheca Sacra, Vol. 48, pp. 494 and foll. and pp. 605 and foll., Failure of Church Union in Japan

_____, Vol. 62, Albrecht, G. E., The Religious Life of Modern Japan.

Catholic World, Vol. 78, April, 1904, Coleman, A., Mission Work in Japan.

_____, Vol. 81, pp 362-369, 1905, Dale, D , Japan and Catholicity.

_____, Vol. 79, May, 1904, McCulloch F., Trappist Monastery.

_____, Vol. 71, 1905, Penman F., Christian Missions (in modern times) in Japan.

The Chinese Recorder and Missionary Journal, The American Presbyterian Mission Press. 1874-194. This includes lists of missionaries in Japan.

_____, Vol. 4, p. 191, and Vol. 18, 486, Greek Church in Japan.

_____, Vol. 2, p. 196, First Japanese Convert made by Bible.

_____, Vol. 5, p. 368, Union Churches in Japan.

China Review Vol. 18, pp.269-278, 1889, Parker, E H., The preaching of the gospel in Japan and Tibet.

Christian Register, Sept. 5, 1889, Kentaro Kaneko, Unitarianism in Japan.

_____, 1889 Knapp, Arthur, The Japanese Mission.

The Christian Movement in its Relations to the New Life in Japan, A

yearbook by Rev. D. C. Greene. Evangelistic work of Protestant missions from all nations, Also statistics from 1903 to 1905.

Church Missionary Intelligencer and Record, a monthly journal of missionary information, Vol. 1-19, 1876-1894.

Church Quarterly Review, Vol. 58, 1904, Japan and Western Ideas.

Congregationalist, Vol. 85, Gordon M. L., The Present Status of the Missionary Movement in Japan.

Directory of Protestant Missionaries in China, Korea and Japan, issued yearly since 1901.

Dublin Review, Vol. 116, April 1895, Cassartelli, L. C., The Catholic Church in Japan, A history from the beginning to the present.

Ecole Francaise d'Extreme-Orient, Bulletin de l', Vol. 11, pp. 197-198, Congress International des associations de la jeunesse chretienne a Tokyo.

Evangelical Alliance of Japan, Annual Report of, comprising the 18 missionary societies, 1881.

Far East, Vol. 3, 1898, Takahashi, G., Christianity in Japan: its past achievements, present situation and future prospect.

———, Vol. 2, 1897, MacCauley C., The Religious Crisis in Japan.

The Far Eastern Quarterly, Vol.12. No.2, Feb. 1953, p. 123, Schwantes, Robert S., Christianity Verus Science in Meiji Japan.

The Foreign Missionary, Accounts of the work of the Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church and selected facts from missionry publications, 1850-1886.

General Conference of Protestant Missionaries in Japan, A variety of papers given in 1872, 1883 and 1900.

International Review of Mission, 1912, Harada Tasuku, The Present Position of Christianity in Japan.

The Japan Christian Quarterly, Vols. 6,8,9, 11-16. Tokyo Christian Literature Society of Japan. Supercedes the Japan Evangelist.

The Japan Christian Year Book, Annual survey of the Protestant missionary work in Japan,

The Japan Evangelist, 1853-1903, Many articles are written by Japanese.

Japan Magazine, 1910, Lloyd, A., The story of a Conversion.

———. Jan., 1928, A pioneer in the Christian World in Japan, p. 147. A brief outline of the life of Paul Sawayama.

Japan Mission Annual, compiled by the American Board of Commissioners for Foreign Missions. This contains many reports on the *Kumiai* (Congregational) churches.

- Journal of Race Development*, 1911-1912, Rowland, G. M., The Modern Japanese Christian Church.
- _____, 1912, Warren, C. M., Some Results of Christian Work in Japan.
- Les Missions Catholique*, Vol. 17, pp. 19-21, La question religieuse au Japon, 1885.
- _____, Vol. 16, p 548, 1884, Mouvement des Japonais versle Christianisme.
- The Missionary Herald*, at home and abroad, 1828-1934, Proceedings for the American Board of Commissioners.
- Missionary Review of the WorId*, Vol. 14, 1901, MacNair, T. M., The Great Religious Awakening in Japan.
- The Open Court*, A monthly magazine devoted to the science of religion, the religion of science, and the extension of the religious parliament idea. 1887-1936.
- _____, 1912, S 310 ff, 699 ff., Carus Paul, A Union of Religions in Japan.
- _____, 27, 1913 S 317 ff., Clement, Ernest W., Christianity and the Nichiren Sect of Buddhism.
- _____, 1910, Kanda Sakyō, The Religious Development of a Modern Japanese.
- _____, 1906, Borton, James L., Independent Christianity in Japan.
- Orthodox Catholic Review*, Vol. 9, pt. 1, 1883, Russian Missions in Japan.
- Presbyterian Review*, Vol. 7, 1886, Knox, G. W., The Missionary Problem in Japan.
- Reformed Quarterly Review*, Vol. 41, 1894, Beck, T. R., Christianity in Old Japan.
- Sunday Magazine*, Vol. 33, 1904, Aylmore, C., Prominent Japanese Christians.
- Transactions of the Asiatic Society of Japan*, Vol. 16, 1889, Dixon, James M., Christian Valley.
- _____, Vol. 6, 1888, Gubbins, John H., Review of the Introduction of Christianity into China and Japan.
- Toung Pao*, Cr. 29, p.231, Planchet, J. M. and Pelliot, P., Les Missions de China et du Japon.
- Unitarian Review*, Vol. 35, p. 138, Kishimoto, N., Unitarian Missionfield in Japan.
- United Presbyterian Mission of Japan, Annual Report*, 1887, Includes the Dutch Refomed Mission in America, the North Presbyterian of America, the German Reformed Church in the U. S. A., and the Presbyterian Church of the U. S. A.

Quarterly Review, Vol. 130, A Hundred Years of Christianity in Japan. Also in the *Eclectic Magazine*, Vol. 77, p. 1.

SPECIFIC WORKS
PERTAINING TO MISSIONS

Addison, Arthur P., *The Heart of Japan*, Methodist Young People's Forward Movement for Missions, 1905.

Anderson, R., *History of the Missions of the American Board of Commissioners for Foreign Missions*, 4 Vol., 1875.

Anderson, R., *Memorial Volume of the First Fifty Years of the American Board of Commissioners for Foreign Missions*, 1861.

Anesaki M., *An Oriental View of Foreign Missions*, Address at the First Unitarian Missionary Conference, 1913,

Arnold, A., *The Light of Japan*, Church Work in the Dioceses of South Tokyo, Osaka and Kiushu. under the Church of England, 1906.

Anjiro, P., *On the Introduction of Christianity*, deals with Roman Catholicism, translated by G. B. Dienst, 1894.

Awdry F., *Daylight for Japan*, The story of mission work in the land of the rising sun, 1904.

Awdry F., *The Story of a Fellow Soldier, being a Life of Bishop Patteson*, 1883.

Baba, Bunyei, *Genji Yume Monogatari: Japan 1853-1864*. (A contemporary record of events from 1853-1864.) tr. by Sir E.M. Satow, 1864.

Baelz, Erwin O. E. von, *Das Leben eines deutschen Arztes im erwachenden Japan; Tagebücher, Briefe, Brichte*, herausgegeben von Toku Baelz, 1931.

Baelz, Erwin O. E. von, *Awakening Japan : The Diary of a German Doctor*, Erwin Baelz. Edited by his son Toku Baelz, translated from the German by Eden and Cedar Paul, 1932.

Baldwin, Stephen L., *Foreign Missions of the Protestant Churches*. 1900.

Batchelor, John, *Ainu Life and Lore, echoes of a departing race*, 1927.

Beach, Harlan P., *Missions as a Cultural Factor in the Pacific*, 1928.

Bennett, A. A., Brown. N., *Sketch of the Life of Rev. Nathan Brown*. (A pioneer Baptist Missionary) , 1895.

Bickersteth, E., *Our Heritage in the Church : Papers written for divinity students in Japan*. 1898.

Bickersteth Rev. S., *Life and Letter of Edward Bickersteth*. (A Bishop in South Tokyo) , 1899.

Bickersteth, Mrs. E., *Japan, The History of the Christian Church in Japan*, 1908.

- Bliss, Edwin M., *The Encyclopaedia of Missions*, a bibliography of foreign missions down to the close of 1890.
- Brown, Arthur J., *The Mastery of the Far East*, 1919.
- Carmichael, A.W., *From sunrise land Missionary Letters from Japan*, 1895.
- Caddel, C.M., *History of R.C. Missions in Japan and Paraguay*, 1856,
- Carrothers, Mrs. J.D., *The Sunrise Kingdom or Life and Scenes in Japan*, 1879. (A story of seven years of missionary life in Japan.)
- Cary, Otis, *A History of Christianity in Japan*. (Protestant Missions. Roman Catholic, and Greek Orthodox Missions. This is the most comprehensive work, and makes use of much hard to get missionary material.) , 1909.
- Cary, Otis, *Japan and its Regeneration*, 1904. (Written for the Student Volunteer Movement for Foreign Missions) .
- Chester, S. H., *Lights and Shadows of Mission Work in the Far East*, 1899.
- Davis, J. Morle, *Davis—Soldier, Missionary*, 1916.
- Dennis, *Centennial Survey of Foreign Missions*, A statistical supplement to *Christian Missions and Social Progress*.
- Durgin, R. L. and Mayer, P. S., *The Christian Year Book Supplement*, 1943.
- Eastlake F. Warrington, translator, *Century, (The First) of the Church in Japan*. translated from the Dutch, in 1884.
- Eby, Rev. C. S., *Tokio Lectures: Christianity and Humanity*, 1883.
- Fisher, Galen M., *Creative Forces in Japan*, New York, (Missionary Education Movement of the United States and Canada) ,1923.
- Forest, Rev. J. H.de, *A Brief Survey of Christian Work in Japan*, 1892.
- Good, J. Isaac, *Famous Missionaries of the Reformed Church*. (This is the German Reformed Church and not the Dutch.)
- Gordon, A. Herbert, *List of Protestant Missionaries in China, Japan and Siam*, 1876 and 1881.
- Gordon, K., *Thirty Eventful Years*, Story of the American Board's Mission in Japan from 1869-1899.
- Gordon, M.L., *An American Missionary in Japan*.
- Gracey, Mrs. A.H., *Eminent Missionary Women*, 1898.
- Gracey, J.T., *The Russian Missionary at Work in Japan*.
- Greene, D. C., *Conditions under which missionary work has been carried on since 1883*.
- Greene, E.B., *A New Englander in Japan: Daniel Crosby Greene*. 1927 (An important account of the problems facing Christians in the early years of the Meiji period and of the intellectual background of the missionaries

- who came to Japan.)
- Griffis, W.E., *Verbeck of Japan; A Citizen of No Country*, 1900.
- Griffis, W. E., *A Maker of the New Orient*, 1902.
- Hail, J. E., *Hirano, a Story of a Japanese Town*.
- Hardy, Arthur S., *Life and Letters of Joseph Hardy Neesima*
- Iglehart, Charles W., *A Century of Protestant Christianity in Japan*, 1959.
- Institute of Social and Religious Research, *World Missionary Atlas*, 1925, Maps and statistics.
- Huc, E. R., *Christianity in China and Japan*. (early date)
- Kishimoto, Hideo (ed.), *Japanese Religion in the Meiji Era*. 1956.
- Kawai, Michi, *Japanese Women Speak; A message from the Christian Women of Japan to the Christian Women of America*, 1934. Includes a bibliography.
- Kozaki, Hiromichi, *Reminiscences of Seventy years; The autobiography of a Japanese pastor*, 1933.
- Laures, John, *Supplement to Kirishitan Bunko*, 1941.
- _____, *Kirishitan Bunko*, (A manual of books and documents on early Christian Missions in Japan, with special reference to the principle libraries in Japan and more particularly to the collection at Sophia Univ.)
- Latourette, Kenneth S., *A History of the Expansion of Christianity*.
- _____, *Missions and the American Mind*
- Launay, A., *Atlas des missions de la Societe des Missions Etrangeres*, 27 maps in folio with text, 1890
- _____, *Histoire generale de la Societe des missions Etrangeres*, 1894.
- Lawrence, E. R., *Modern Missions in the Far East*, their methods, successes and limitations, 1901.
- McKeen, P. F., *Sketch of the Early Life of Joseph Hardy Neesima*, 1890.
- Miller, H. K., *History of the Japan Mission of the Reformed Church in the United States*, 1879-1904.
- Montgomery, Helen B., *Western Women in Eastern Lands; An outline study of fifty years of Women's work in foreign missions*, 1910.
- Morton, Mrs. H. J. N., *Filled Hands; A story of Mrs. A. M. Drenman's life and work in Japan*. 1899.
- Murdoch, J., *Report on the Religious Tract Society in Japan*, 1882.
- Naruse, J., *A Modern Paul in Japan; (probably Paul Sawayama)* .

- Oyabe, J., *A Japanese Robinson Crusoe*, 1898. (The author studied for ministry in the U. S) .
- Pascoe, C. F., *Two Hundred Years of the S. P. G.* (Society for the Propagation of the Goscel in Foreign Parts) (An historical account of the society from 1701 to 1900 based on their reports) .
- Peery, R. B., *Lutherans in Japan*, 1900. (A history of the Lutheran Church started in 1893)
- Peery, R. B., *The Gist of Japan*; this includes an accounts of the condition of the native church.
- Pettee, J. H., *Missions Co-operating with the Kumi-ai Churches of Japan*. (A sketch from the period since 1869 and a report for the years since 1893.)
- Pierson, Mrs. K. H., *A Quarter of a Century in the Island Empire or The Progress of a Mission in Japan*, 1899.
- Pitman, Mrs. E. F., *Heroines of the Missionfield*, Biographical sketches of 29 lady missionaries (including Miss S.B. Higgins in Yokohama) 1881.
- Price, Maurice T., *Christian Missions and Oriental Civilization: A Study in Culture Contact*. (The Reactions of Non-Christian Peoples to Protestant Missions, from the standpoint of individual and group behaviour, 1924.)
- Protestant Episcopal Church in the U. S. A.* This is in the American Church History series.
- Report of the American Bible Society's work in China and Japan*, 1878-1880.
- Ritter, H., *History of Protestant Missions in Japan*, translated from the German by G. E. Albrecht and revised by D. C. Greene and M. Christlieb, 1898.
- Ritter, Dr. H. and J. Tsiosiro, *Dr. Joseph Hardy Nishma*.
- Saito, Soichi, *A Study of the Influence of Christianity upon Japanese Culture*. *Institute of Pacific Relations*, 1931, Vol. 5.
- Salvation Warfare*, 1901, summary of the work done by the Salvation Army.
- Sono, Mrs. Tel, *Tel Sono, The Japaneese Reformer*, 1892.
- Speer, Robert Elliott, *Report on the Japanese Missions* of the Presbyterian Board of Foreign Missions, 1897.
- Stock, E., *History of the Church Missionary Society*, 1899.
- _____, *Japan and the Japan Mission of the Church Missionary Society*, 1887.
- Strong, William Ellsworth, *The Story of the American Board*; an account of the first hundred years of the American Board of Commissioners for Foreign Missions, 1910.
- Takaya, Michio (ed.), *The Letters of Dr. J. C. Hepburn*, 1955

- Taylor, W., *Missionary work and its effects upon workers with statistical tables of all Missionboards*. 1883.
- Thomas, Winburn T., *Protestant Beginnings in Japan*, 1959.
- Tristram, H. B., *Rambles in Japan: The Land of the Rising Sun*, 1895, (a diary of a journey, the object of which was to ascertain the position of missionary work in Japan) .
- Tucker, Henry St. George, *The History of the Episcopal Church in Japan*, 1938.
- Uchimura, K., *How I Became a Christian: Out of my Diary, by a Heathen Convert*, 1905.
- The Unitarian Movement in Japan*, Sketches of lives and religious work of representative Japanese Unitarians, 1900.
- Verbeck, G.F., *History of Protestant Missions in Japan*, 1883.
- Wilberforce, B.A.H., *A Sketch of the Lives of the Dominican Missionaries in Japan with a preface by the Archbishop of Westminster*, 1870
- Wilbur, Earl M., *A History of Unitarianism*, 1945
- Yasui, Chiuhei, *Bemmo or an Exposition of Error*, a treatise directed against Christianity. Tr. by J. H. Gubbins with a preface by Shimazu Saburo, 1875.